

## 第二百三十六話 風声鶴唳（ふうせいかくれい）（ダバオ誤報事件）

源平合戦、富士川の戦い(治承4(1180)年10月20日)において、水鳥の羽音に驚いた平家軍が慌てて撤退したと云う逸話は有名だが、同様な事態が現代でも起き得ることを示したのが、帝国海軍最大の不祥事とされる「ダバオ誤報事件」（ダバオ水鳥事件）(1944/9/10)である。

### 1 誤報事件惹起前の比島正面の戦況等

テニアン島の玉砕(1944/8/3)等連合軍はマリアナ、西部ニューギニアを確保しつつあり、フィリピンへの米軍爆撃機や艦載機の空襲が開始され、9月上旬ミンダナオ島ダバオを中心としたフィリピン各地に延べ400機が来襲した。

### 2 関係部隊

海軍第32特別根拠地隊(陸軍4個大隊含む)(32特根)(司令部ダバオ)、  
第一航空艦隊(1航艦)(司令部ダバオ)、連合艦隊

### 3 誤報事件の時系列

- ・ 索敵機 ミンダナオ東方海上に米大機部隊発見
- ・ 9月9日夜 32特根司令部から「警戒厳に」との命令
- ・ 10日未明(0400頃) ダバオ南方100kmのサランガニ見張所から「湾口に敵上陸用舟艇発見」との報告 特根司令部は、1航艦に連絡、偵察依頼
- ・ 0800頃 サランガニ警備隊「湾口に多数の上陸用舟艇」「水際撃滅攻撃する」と打電
- ・ 特根司令部 敵のダバオ上陸を信じ、「陸戦配備」を下令
- ・ 1215 特根司令部「敵ダバオに上陸開始」と指揮下部隊に発信、司令部撤退開始
- ・ 1航艦司令部は、特根司令部の聴取結果に基づき、上陸用舟艇の状況を打電、事後の指揮を隷下26航空戦隊司令長官に委任し、奥地に移転 1605一航艦による偵察機の発進
- ・ 連合艦隊は、フィリピン防衛のための「捷1号作戦警戒」発令など所要の命令を下達
- ・ 夕刻 一航艦司令部から「敵上陸の事実なし」との報告 一件落着
- ・ 司令部の宿舎も防空壕も自暴自棄になった将兵に荒らされていたという。



### 4 誤報の原因

前日の猛烈な空襲と敵機動部隊の接近もあって、疑心暗鬼となり、漁船群を上陸用舟艇、第二飛行場走行中の味方トラックを敵の水陸両用戦車と誤認した。

### 5 若干の観察等

- ・ 何故 風声鶴唳の如き不祥事が起きたか？ 基本中の基本である状況の確認措置が為されなかった。一部において疑問を呈する向きもあったが、沈着冷静たる司令部が浮足立った。
- ・ 特根司令部や1航艦司令部の逃げ足の速さには驚く。
- ・ 情報収集態勢や敵情の分析不備は論外
- ・ 緊急偵察命令の措置も遅すぎる。重要情報はダブル確認の要もある。
- ・ 誤報事件の調査は行われたが、証言に食い違いがある？
- ・ 寺岡一航艦司令長官と代谷特根司令は更迭された。尚、寺岡中將は後に三航艦司令長官に、代谷少將は予備役に、参謀等の責任は問われなかった。
- ・ ダバオ事件につながる事案、トラック島が米機動部隊の猛襲を受けた。(1944/2/17、18)、転任司令官の歓送迎会の為に警戒態勢を解いたそのタイミングに攻撃を受けた。
- ・ ダバオ事件の余波を受けたのが「セブ事件」(1944/9/12)である。ダバオ反撃の為にセブに集結していた零戦が、帰投を前にグラマンの空襲を受けて壊滅した。(海軍航空戦力は殆ど壊滅状態となり、事後神風特別攻撃隊発足へと移行したとされる。)

(了)